12 月 14 日 メッセージ

聖書：イザヤ書 40 ： 1 - 11

「呼びかける声がある」

荒れ野に道を通すのは簡単なことではありません。タイ南西部、カンチャナブリー郊外に泰面鉄道の遺構があります。ジャングルを切り開き、高さ 10 メートルを超える岩山を切り通して造られた鉄道です。国際法で保護されるべき捕虜も動員され、多くの犠牲者が出ました。今も残る平坦な路盤は技術力の高さと労働者の血と涙を思い起こさせます。

「主のために、荒れ野に道を備え／わたしたちの神のために、荒れ地に広い道を通せ」(イザヤ書 40:3)と命じられても、イザヤの時代には誰もなんともすることができませんでした。北イスラエル王国はアッシリアの攻撃により滅亡します。南ユダ王国はその様子をただ見守ることしかできません。「神はどこにおられるのか」「神の守りを期待することは難しいのか」。未来に対して希望を持つことが難しい時代だったと言えるでしょう。そのような中にあって「主のために」＝神を中心として生きることは簡単なことではなかったのです。

それでも、イザヤは「草は枯れ、花はしぼむが／わたしたちの神の言葉はとこしえに立つ」(イザヤ書 40:8)と、神の言葉の永遠性を語ります。たとえどのような苦難に遭おうとも、神は決して一人ひとりを見捨てることはない、と。だからこそ、来るべき救いの日のために道を通す必要があるのだ、と。

この預言は、洗礼者ヨハネの登場によって実現したと聖書は語ります(「『荒れ野で叫ぶ者の声がする。「主の道を整え、／その道筋をまっすぐにせよ。」』そのとおり、洗礼者ヨハネが荒れ野に現れて、罪の赦しを得させるために悔い改めの洗礼を宣べ伝えた。」マルコによる福音書 1:3-4)。しかしながら、ヨハネが切り開いた道は、確かにイエスの登場までまっすぐ伸びてはいたものの、決して「広い道」とは言えませんでした。「主の道を整え、／その道筋をまっすぐにせよ」(マルコによる福音書 1:3)という言葉だけが引用されている辺りにその思いがにじみ出ています(「呼びかける声がする。／『荒れ野に主の道を備えよ。／私たちの神のために／荒れ地に大路をまっすぐに通せ。』」イザヤ書 40:3、聖書協会共同訳)。

全ての人が神に立ち帰った訳ではありません。いや、実際にイエスを目の当たりにした人たちの中にさえ、イエスを亡き者にしようとする者たちがいました。そして、ヨハネ自身もまた、その道の途上で命を落とすことになりました。やはり、「荒れ野に道を備え」ることは容易ではありませんでした。それでも、ヨハネは神の呼びかけに応えて、人々が神に立ち帰るようにと、神の平和を実現しようと奮闘したのです(「わたしは神が宣言なさるのを聞きます。主は平和を宣言されます／御自分の民に、主の慈しみに生きる人々に／彼らが愚かなふるまいに戻らないように。」詩編 85:9)。

「コスパ」（コストパフォーマンス）、「タイパ」（タイムパフォーマンス）が最優先される現代にあって、このヨハネの生き方は不格好に思えるかもしれません。最初から結果がわかっていることを敢えて行うことに何の意味があるのか、と。また、「なぜ神は結果がわかっているのに非効率に人間を用いるのか」と疑問に思う者もあるかもしれません。

確かに結果だけ見れば、神が直接介入される方がコスパもタイパも良いでしょう。多くの人間が苦しんでいる今こそ、大鉈を振るって正義を実現してほしいと願う声も聞こえてきます。それでも、「ある人たちは、遅いと考えているようですが、主は約束の実現を遅らせておられるのではありません。そうではなく、一人も滅びないで皆が悔い改めるようにと、あなたがたのために忍耐しておられるのです」(ペトロの手紙二 3:9)。

神は一人ひとりが立ち帰ることを待っておられます。厳しいかもしれません。苦しいかもしれません。それでも、一人ひとりが主の道を備えた時、一つひとつは細くて小さい道が、縒り合わされて大きな広い道になるのを今か、今かと待っておられるのです。

「呼びかける声がある」(イザヤ書 40:3)。神は今も私たちに呼びかけておられます。共に荒れ地に道を通そう、と。まっすぐにイエスを迎え入れよう、と。そして、その道を隣へ、そのまた隣へと広げていくことを期待されています。

いよいよクリスマスは近づいています。神の呼びかけに応えて平和への道を切り開くのは今なのです。